

私の教育実践

弘中史子 Chikako Hironaka
滋賀大学 経済学部 / 教授

1. はじめに

滋賀大学に着任して以来、毎年試行錯誤をして授業の改善につとめてきた。科目名や内容が同じ場合には方法を変化させられないかと腐心してきた。これは私が学部・大学院時代を通じて師事した小川英次先生（学校法人梅村学園名誉理事長、名古屋大学名誉教授）の影響が大きいだろう。私が知りうる限り、先生はご定年にいたるまで、毎年授業を変化させていらしゃった。私が師事した当時、先生は大学での教育・研究に加えて公職も多くつとめておられ多忙な日々を送っていらしゃったが、授業をとっても大切にしておられ、とりあげるテーマ、教授方法から紹介する企業事例にいたるまで、毎年アップデートしておられたのである。

そういう意味で、私の教育実践も、常に発展の途上でありたいと願っている。本稿では、学部の専門科目と専門演習を事例としてとりあげて現在の実践について紹介しつつ、課題を見出したい。

2. 専門科目「中小企業論」「生産マネジメント」における取り組み

ここ数年、私が担当する専門科目「中小企業論」「生産マネジメント」では、アクティブ・ラーニングを取り入れている。これはマレーシアの在外研究での経験からヒントを得たものである。マレーシアで教員たちは「いかに学生に主体的に授業に関わってもらうか」に腐心していた。帰国後、私はこれを日本流にアレンジして実践してみることにした。

具体的には、学生を5,6人のグループに分けた上で、各グループに対して、授業のテーマに基づいた「問い」を、授業の前週に学生に伝達する。概ね2回から3回の授業を1クールとして、問いへの答えを探っていく。私の場合は経営学関連の授業を担当していることから、企業が直面している課題をとりあげ、その課題が生じる背景、それを解決するためには何をなすべきか

といったことを問いとして提示することが多い。学生は授業に参加する前に、その問いに関して事前に下調べをして自分の考えをまとめ、A4サイズの1枚のシートに記載して授業にのぞむ。

授業では、グループに分かれてその問いについて議論し、自分たちの結論を出す。その後、プレゼンテーションをして学生間で質疑応答を行う。その後に、私が講評と解説を行う。学生たちは、他のグループのプレゼンテーションを聞き質疑応答をすることで、さらに学習を深めることができる。また、グループごとに異なる問いが与えられているため、自分が取り組んだ以外の様々な課題を学ぶことができるようになっている。私の講評・解説では、受講生のプレゼンテーションとは異なる視点や考え方、背景にある理論、最近の動向などを提示する。こうしたタイプの授業は、学生にとっては授業前の学習時間がかかることから、受講希望者はあまり多くはないのが現状である。また受講しても途中から離脱してしまう場合も少なくない。しかし最近は離脱してしまう学生が減り、出席率が毎回100%に近づいており、少しずつ手応えを感じている。

現在の課題は次の2点である。第一は、問いの設定である。問いが曖昧だと学生の議論が拡散してしまう。一方で問いが限定されすぎていると、学生が提示する結論も平凡なものになりがちである。1クールで完結できるような問いで、かつ質も高いものを多く教員が準備できるかが勝負である。第二が、学生のプレゼンテーションである。せっかく興味深い結論が生まれても、適切に伝達できなければ他の学生に伝わらず、学びの効果が削減されてしまう。相手に説得的に伝えるためには、発表技法の工夫、説明の流れや論理性など、あらゆる要素が絡んできく。限られた時間の中で専門知識を修得してもらいながら、プレゼンテーションの質を向上させることに取り組んでいるところである。



3. 専門演習（ゼミ）における取り組み

現在、専門演習は金曜日の午後を使って3年生・4年生合同で実施している。2年間を通して、経営戦略・モノづくりに関するグループ研究を3つ、個人研究1つに取り組んでもらっている。

春学期においては、3年生は基本的なテキストを修得した後に、グループ研究に取り組む。自分たちでテーマを設定し、既存研究の論文を収集し研究のフレームワークをつくる。そしてそれを実証するために、アンケート調査をして統計分析したり、企業へのインタビュー調査をしたりする。4年生は就職活動が落ち着いた頃から、卒業論文への取り組みが本格化する。2学年合同でゼミを実施しているため、3年生は、4年生の卒業論文報告から研究の形を学ぶ機会を得られる。一方で4年生は、3年生のグループ研究を支援する役割も担う。既存研究をどのようにレビューするのか、どうしたらアンケートの回答率を向上できるのか、企業にインタビュー調査を承諾してもらうためにはどのような工夫が必要なのかなど、助言は多岐にわたる。後輩たちの研究を支援するプロセスで、4年生自身の研究能力がかなり向上すると思う。

秋学期の前半に入ると、3年生は毎年出場している日本学生経済ゼミナールの大会に向けて、研究を完成させてプレゼンテーションの準備にとりかかる。4年生は、自身の卒業論文を完成させる。この時期になると3年生が成長してきて、4年生の卒業論文報告にも厳しい質問がとんでくるため、4年生も気が抜けないようである。

秋学期も後半に入ると、3・4年生混合でのチームをいくつか構成して、新たなグループ研究に取り組む。研究成果は、卒業生たちも参加する合宿で発表する。卒業生には、各研究への質疑・コメントを担当してもらっている。社会人の先輩たちの鋭い指摘、厳しくもあたたかい助言、ビジネスの現状についての解説は、通常のゼミでは得られない貴重な刺激となっている。

社会人としての心構えについてのアドバイスを受けたリ、就職活動の相談をしたりする学生も多い。

専門演習における課題は、研究で育んだ論理的思考を、他の面においても応用できるようにすることである。身近な例が就職活動である。就職活動の最初のステップとなるエントリーシートを学生からみせてもらうことがあるのだが、残念なことに記入内容で論理性・説得性に欠ける点が散見される。問いに対する答えになっていないことや、内容が矛盾していること、何を主張したいのかわからない時もある。企業で人事を担当している卒業生たちからは、「学生時代にがんばったことや志望動機を、論理的・明快に表現してほしい」と常々注文をいただいているのだが、...。一つの試みとして導入しているのが、学生同士での添削である。自分のことを書いているがゆえに客観的になれないのではないかと考えたためである。その際に1人に添削してもらうのではなく、複数のメンバーにみてもらうように伝えている。このことで、客観的な視点が磨かれることを期待している。

4. むすびにかえて

以上、専門科目と専門演習における現在の教育の状況を紹介しつつ、課題をふりかえった。大学での授業では、受講する学生は毎回かわっていく。今年うまくいったと思って喜んでいても、その手法が来年も通用するとはかぎらない。受け手の反応を見つつ、柔軟に対応していく必要がある。また、私のスタイルはグループワークを主体にしているが、それが苦手な学生がいることをふまえれば、今後は他のアクティブ・ラーニングのスタイルも取り入れていかなければならないだろう。大規模クラスへの応用も課題である。受講者の多い授業では思ったようにアクティブ・ラーニングを機能させることができず、現在、改善策を講じている。その意味で、教育実践は永遠に続く改善の道のりともいえ、今後も真摯に取り組んでいきたいと考えている。